

## － 小 学 校 低 学 年 －

## 『水はかせになりたいな』

会津若松市立小金井小学校2年 百瀬 寧衣子

きょ年の十二月に、家ぞくで「水やでん気のむだをなくそう」ときめました。でん気はへってきたのに、水はへらなくて、何でだろうとふしぎに思いました。だから、図書かんで本をかりて、水はかせになって、今より水を上手につかえるようにしようと思いました。

まずびっくりしたのは、わたしたちがつかうま水が、ちきゅうにはそんなにないことです。海の水はいっぱいあるけど、しおが入っているからつかえません。せかい中の人水をつかいたいから、水を大せつにつかわないと、たりなくなったらこまると思いました。

それから、水をつくる工じょうがあることも分かって、またびっくりしました。いままで、水道はきれいな川の水が出てくると思っていたからです。川の水のごみをとったり、薬できれいにしたりして、安心してつかえる水にしてくれています。おとうさんが、

「しんがたコロナにならないように、水道水にいつもよりえんそを多く入れてるってしせいだよりに書いてあるよ。」

とおしえてくれました。つかう人のことをかんがえてつくってくれてうれしいです。一生けんめいつくってくれた水だから、むだにしないで大せつにつかいたいと思いました。

さいごに、水はぐるぐる回っていることが分かって、またまたびっくりしました。つかった水はきれいにされて、また川にもどされます。だから、水をよごさないのも大せつです。あぶらやせんざいをたくさんがすと、水をきれいにするのが大へんになります。家でごはんをたべたあとに、しょっきがあぶらでよごれていたなら、かみでふいてからあらっています。何でそんなことをするのかかんがえたこともなかったけど、水をよごさないためにやっていると分かりました。大はっ見です。そこで、家でしている水のつかい方のくふうをしらべることになりました。

本に書いてあったむだをなくすためのくふうは、ほとんどしていました。ほかにはないか、おかあさんにきいてみると、せんたくものによってあらい方をかえていました。おふろをあらうスポンジは、せんざいをつけなくてもよごれがおちるものをつかっていました。一ばんの大はっ見は、じゅんぼんをかかんがえてしょっきをあらっていたことです。あぶらでよごれたしょっきを先にあらってしまうと、ほかのしょっきもあぶらでよごれてしまいます。そうすると、つかうせんざいのりょうがふえて、水がよごれてしまいます。つかう水のりょうもふえてしまいます。水をかんがえてつかうことで、水を上手につかえるようになれることがわかりました。

水のことがわかって、自分から水を大せつにつかおうと思うようになりました。すこし水はかせになれたと思います。これから、水をかんがえながらつかって、いつか本もの水はかせになれるように、がんばりたいです。

『大切にしよう、命の水』

仙台市立寺岡小学校4年 フェイガン 瑠輝奈

じゃ口をひねれば出てくるきれいな水。飲んだり、料理に使ったり、手をあらったり、お風呂やトイレなど、水は生きていくための大切なしげんです。私は、社会の「水はどこから」のじゅ業で、水にはかぎりがあること、そして、私達が使っている水道の水を作るために、すごい時間とお金がかかっていることを知りました。

まず、雨や川をためたダムからの水は、じょう水場におくられ、水の中の砂やゴミをしずめて、薬を入れて水をかきまぜます。そして、かたまりになったゴミをしずめて、それでもしずまなかったゴミをろかします。そのあとに、ようやくできた水を私達が毎日飲んでます。私は、いつも飲んでる水が、こんなにも時間とお金をかけて作られているとは思いませんでした。そして、私はこんなに時間をかけて作られたきれいな水を、むだにしていけないかなと考えるようになりました。

私のお母さんはいつも、私と妹が手をあらっている時、

「水もったいないから、石けんを付けている間は水止めてね。」

と言います。最初は、石けんで手がよごれているし、めんどくさいなと思っていました。そんなある日、お母さんがこんな話をしてくれました。

私が生まれて一カ月。東日本大しんさいがあったそうです。その日は、私の一カ月けんしんの日で、病院にいたそうです。その後、信号も止まり、雪がふってきて、いつもは四十五分で帰れる道も、二時間いじょうかかって帰ってきたそうです。家に帰ってみると、たなはたおれ、お皿やコップもわれ、電気、水、ガスが止まっていたそうです。お母さんは、家にあったロウソクや電池、かい中電灯を持ってきて、電池式のストーブで料理したり、車の中でけいたいのにじゅう電をしたり、お風呂にためていた水で手あらいやトイレなど、なんとか数日すごしたそうです。電気、水、ガスがない中、水がないのが一番大へんだったと言っていました。当時、私がまだ小さかったので、お風呂に入れてあげたかったけど、水がなく、体中にしっしんができたり、ペットボトルの水は、こなミルクのために使い、少ない水を大事に大事に使ったそうです。六日後、ようやくオレンジっぽい水が出てきて、次の日にはやっと飲める水が出て、すごうれしかったと話してくれました。ガスは、一カ月いじょうも使えなかったと言っていました。水があれば、おゆも作れて、料理もくふうしてできたそうで、水が一番大事なしげんだなと思いました。私は、もし今水がなくなったら、手もあらえないし、水もいっぱい飲めないし、大変だなと思いました。

もうすぐ暑い夏が来ます。もし長い間雨がふらなくて、暑い日が続いたら、ダムの水がかわいて、水ぶ足にならないか心配です。また、じゅ業で市の給水量は人口と共にふえていると習いました。毎年市の人口はふえているので、水をもっともっと大切に使わないといけないなと思いました。

私は、今回水について勉強したり、お母さんの話を聞いたりして、水は私達が生きていくために、一番大切なしげんだなと思いました。これからは、手をあらうときやかみの毛をあらうときは、きちんと水を止めて、習字の筆をあらうときは、コップに水をためてあらうなど、少しでも水をむだにしないようにしたいです。じゃ口をひねる時は、水はいつでもどこでも、かぎりなくあるわけではないということ、このきれいな水は、すごい時間とお金がかかっているということを頭に入れて、感しゃして水を大切にしたいと思います。

## 『水道民営化を考える』

宮城県仙台二華中学校3年 佐藤 若葉

今年、新型コロナウイルスが猛威を奮い、学校の休校をはじめ、様々な行事や大会の中止が余儀なくされた。特効薬があるわけでもなく、一番感染予防に効果があると言われたのは「手洗い、うがい」だ。手をしっかり洗えば、ウイルスの残存率は0.01%まで減るそうだ。蛇口をひねれば水が出てくるし、その水で手を洗うのは当たり前。おうち時間で頻度が増えた料理にだって、きれいな水は欠かせない。水を使う機会が増えた今年だからこそ、私の住む宮城で再来年から予定されている「水道民営化」についてしっかり調べてみたいと思った。

上水道、下水道、工業用水を一体として民間の企業が運営する「水道民営化」の条例案は去年の十一月、全国で初めて宮城県で可決された。二〇二二年の四月から民間企業による運営が始まるそうだ。私はそのニュースを初めて聞いたとき、おいしい水が飲めるのなら別に関係ない、と軽く考えていた。しかし調べていけばいくほど、県民の間でも、議会でも意見が分かれる大きな問題だということが分かってきた。

宮城県が民営化を進める理由は、施設の老朽化、人口減少等によりコストの削減をしなければ、将来的な水道料金の値上げが免れないからだという。宮城県の試算によると、四十年後には、供給量が現在の七十%まで落ち込むというデータがあるようだ。また施設の中には、昭和三十年ごろに建てられたものもあり、建て替えには多額の費用がかかるらしい。異常気象や自然災害が相次ぐなか、もし施設が壊れ、水が供給されなくなったら、と考えると恐ろしい。一刻も早い建て直しを望むが、費用の面から考えるとそう簡単ではないのだろう。運営権を売却すると二十年で二百五十億円ものコストが削減できるという記事も読んだ。二百五十億と聞くととても莫大なものに思える。その分のお金を福祉や教育に充てられるかもしれない。それに生活で必須となる水が値上がりすれば、生活への影響は大きいだろう。民間に委託することで、値上げが抑えられるのならば、私達はこれからも安く水を飲み続けることができるはずだ。

しかしその一方、安全面での不安がぬぐい切れないというのが反対派の意見だ。品質が下がるのではないか、もしその企業が倒産したらどうするのか、非常時の対応はどうするのか。公の水道だからこそ追求されてきた安全性、公衆衛生の理念を民間の企業がしっかり引き継げるのか。今まで安心して飲んできた水が飲めなくなることを恐れる人たちの気持ちも痛いほどよくわかった。東日本大震災の時、我が家は断水し、両親は水の確保に必死だったそうだ。母は近くの小学校まで幼い兄弟を三人連れ水ももらいに行ったと話してくれた。当時の私はやんちゃ盛り、母の言うことを全く聞かず走りまわっていたらしい。今思い出してもとても大変だったと語る。そんな中なぜ？という私の問いに母はきっぱり答えた。「水がなくては生きていけない。」だからどんなに大変でも行く必要があった、と。蛇口をひねっても水が出てこない。幼かった私にはかすかな記憶しかない。それでも、とても大変だったということが伝わってきた。

宮城県の意見と反対派の意見とを調べると、私はどちらが正しく、どちらがいいのかよくわからなくなってきた。どちらの意見も大切なものである。賛成と反対、意見は全く異なる。しかし私は、根底にある気持ちはどちらも一緒なのではないかと思った。

「水は大切である。水をこれからも安心して使い続けたい。」という思いだ。

水は私たちの生活に絶対欠かすことのできないライフラインだ。水がなければ私たちは死ぬ。だからこそ、蛇口をひねって飲める水は、なるべく安い方がいいと思う。しかし、必ず安全でなければいけない。宮城県は民間の企業に委託するにあたり、今よりも厳しい水質の基準を設ける方針だそうだ。安全に、おいしい水を。その思いに変わりはない。

水道民営化について調べ、自分の生活に及ぼされる大きな影響を知った。そしてそのことを知らず、水を当たり前だと思っていた自分の考えの甘さを反省した。

以前、カンボジアをフィールドとした高校生の課題研究の発表を聞いたとき、日本の水環境のすばらしさを知った。蛇口をひねれば水が出てくること、おいしい水を安全に飲めること。これらは決して当たり前のことではない。私たちが守っていかなければいけないものだ。水道民営化について、賛成か反対かは決め切れなかったが、私なりにひとつの考えを持った。「知る」という努力をこれからも続けていこう、と。中学生で民営化を知らない人は多いかもしれない。私もその一人だった。でも今は違う。無知はいけないからだ。知って、考えて、行動する。できることを続けていきたい。当たり前を過信せず、この水環境をずっと守っていくために。

－ 入 選 －

－小学校低学年－

「大切なバケツの水」＝小瀧 タオ（会津若松市立行仁小学校2年）

「水はみんなのたからもの」＝佐々木 あおい（会津若松ザベリオ学園小学校2年）

「安心がつづくように」＝小関 義恭（白石市立白石第一小学校3年）

「私がおんでいる水はどこから来たの」＝愛澤 莉杏（会津若松ザベリオ学園小学校3年）

「水はたからもの」＝中村 大（会津若松市立一箕小学校3年）

「おいしい水」＝水江 智哉（渋川市立豊秋小学校3年）

－小学校高学年－

「一人の女の子から」＝稲辺 苺（東松島市立赤井南小学校4年）

「大切な水道水」＝小池 彩音（会津若松市立河東学園小学校4年）

「私たちのきれいで大切な水」＝水根 美花（湘南白百合学園小学校4年）

「水に感謝」＝佐々木 優花（会津若松市立鶴城小学校5年）

「未来へ残したいきれいな水」＝三浦 雪乃（石巻市立山下小学校6年）

「本当の幸せとは」＝大島 暦（川崎市立柿生小学校6年）

－中学生－

「水の大切さ」＝横山 さくら（宮崎市立生目中学校1年）

「人と水」＝栗林 希々花（石巻市立山下中学校2年）

「日々のあたり前に感謝を」＝中村 妃路（宮崎市立生目中学校2年）

「水ストレスのない世界へ」＝遠藤 萌花（米沢市立米沢第一中学校3年）

「未来につなげたい宝」＝瓜生 朋花（会津若松市立第二中学校3年）

「命の保証」＝高畑 彩葉（川崎市立塚越中学校3年）